ひめかゝみ

八

ロ g
1550
8

比賣鑑紀行巻第一

目録

周太任　列女傳　附邑姜　同
鄭善果母　古今列女傳
鄒孟母　同上
田稷母　同上　附　崔玄暐母　唐書
陶侃母　世説新語
魏溥母　古今列女傳
張奎母　五倫書
皇甫謐叔母　同上
陳堯咨母　古今列女傳

門 口 9
號 1550
巻 8

比賣鑑紀行巻第一

目録

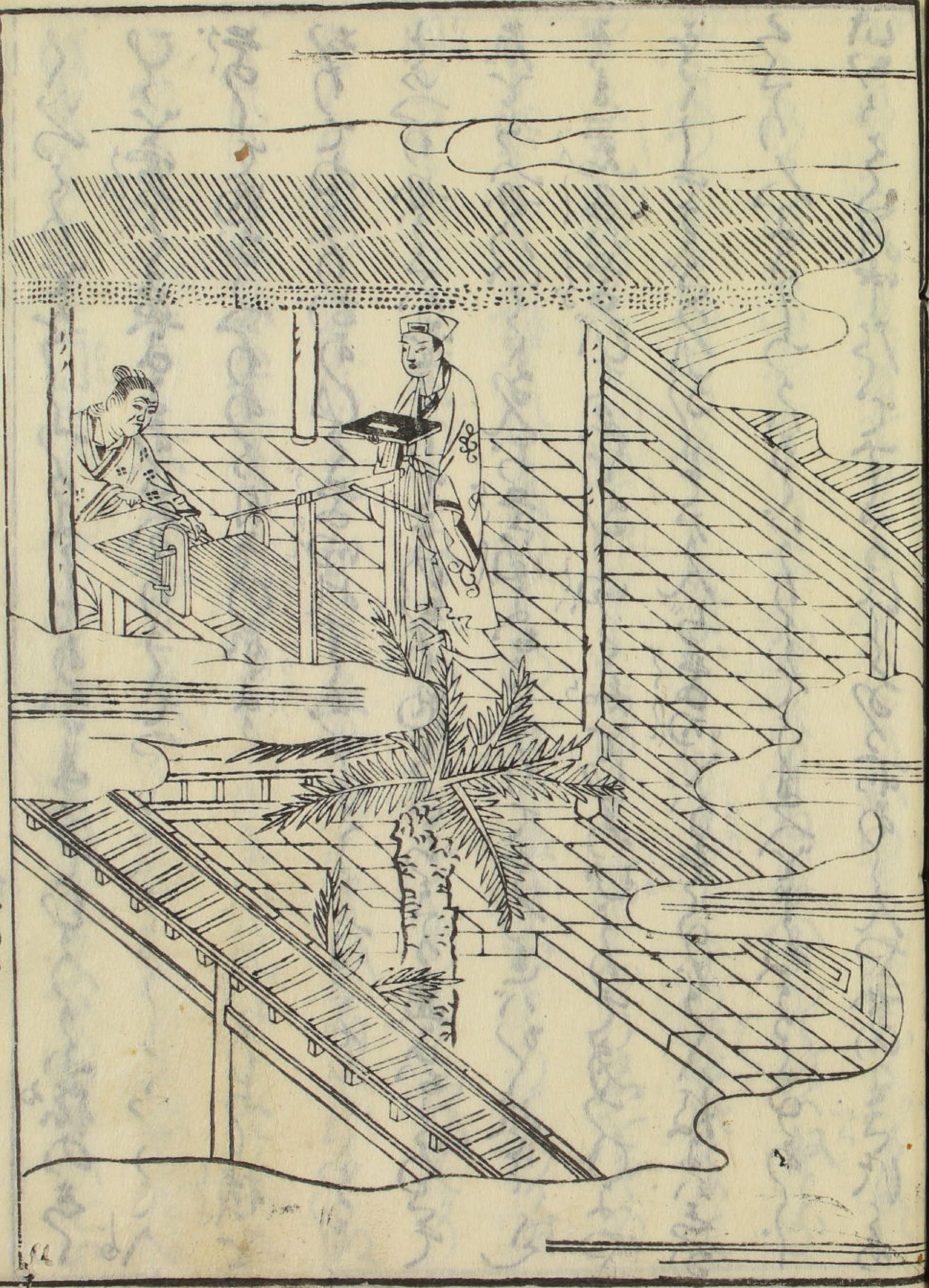
柳仲郢母　温公家範
李郭彦母　祥往捜餘
二程子母　伊川文集
尹和靖母　増補列女傳
曹太家　後漢書
恵心僧都母　發心集
脊然母　元亨釈書
證空母　同上
附
陳邈妻　増補列女傳
小條時頼母　徒然草
楠正行母　太平記
清水冠者義高母

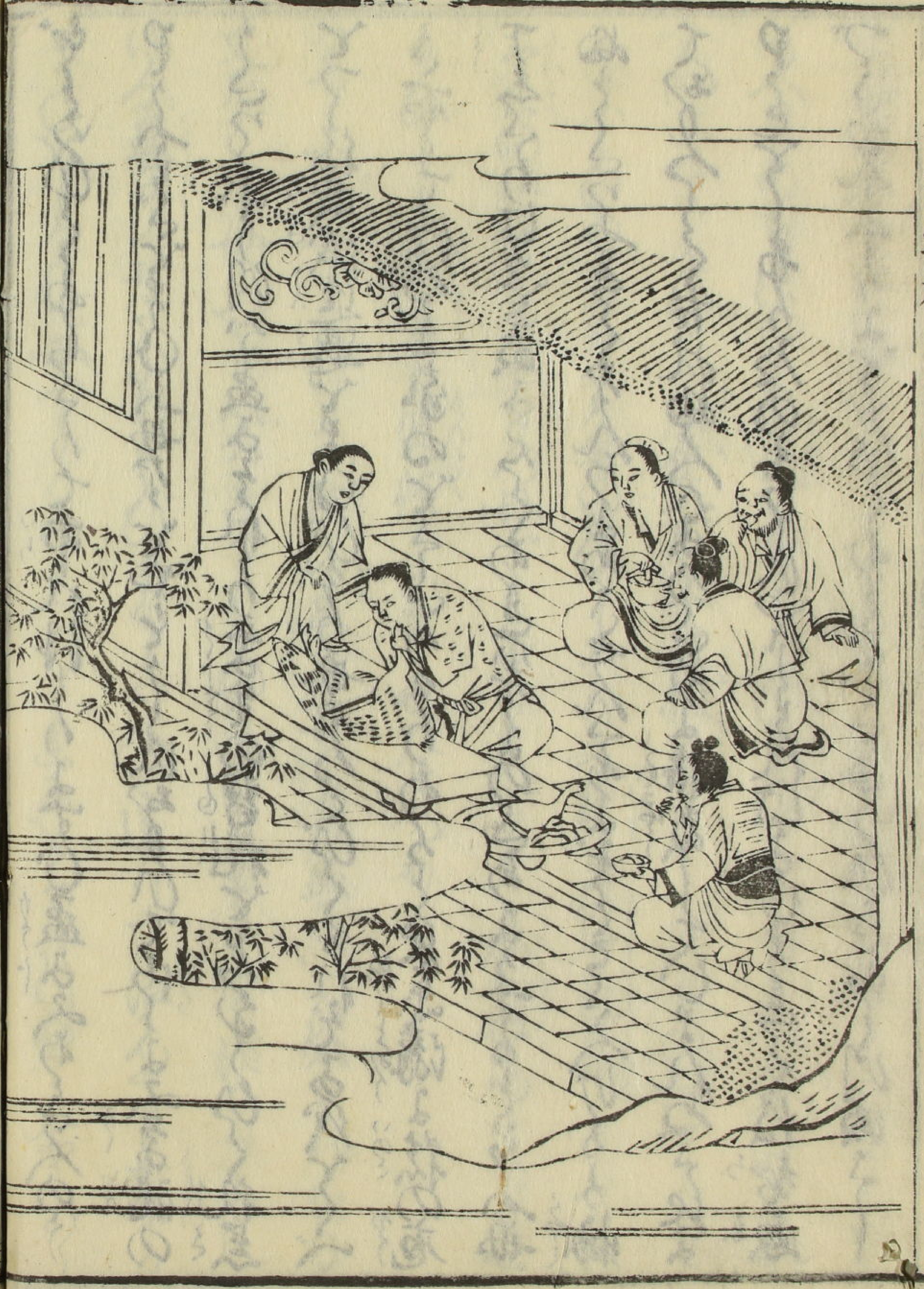
比賣鑑巻之一

紀行第一

此書ハ人の母としておしへ〳〵とおしへのみちをのつと
りとするのたつとき小学の立教の事をとなへ
とふなどをつゞり
いにしへ周の太任といひしハ王季の妃文王の母なりかれ性
うるはしくまことありてまめやかにをしへありよろの徳あつく
かひくゝるかたより文王を有身し時胎教といふことを
めさとのめにあしきいろを見ず耳にみだらなる聲をきかず口に
まうやうなことをいはずしかれバ文王生れさせ給ひて聖の徳そなはれ

らせたまふ任事(にんじ)とをしへあまつさへ百事とゝのへて行けり
まへものゝちはつねに仁政(じんせい)をなしたまひしとかや天に命(めい)ぜられ
人はいふにおよばず周家(しう)八百年の祖宗(そそう)となし給ふ其なりし
そのすゑはおさなき時の母のためしなり文武王(ぶんぶわう)の后邑姜(いうきやう)と申せし
君公(くんこう)のをしへを成王(せいわう)の母ぎみにておはしければ胎教(たいけう)をつとめさせ
あひしかバ成王(せいわう)も賢徳(けんとく)そなはらせたまへり
又孟母(まうぼ)ときこえけるハ鄒(すう)の孟子(まうし)の母なり孟子いとけなかりし
父なくて母やしなひかつよりそのそめの家へうつられちかし
ゆへ孟子(まうじ)のおさなあそびにはなきひとを送りて哭(こく)かなしみ葬(さうふ)る
まねをしけれバ母かくてハよからずとて市ちかくうつる
ぢかくうつりて市(いち)ちかけれバ孟子(まうじ)又あきうどの
まねをなすを見て母なをよからずとやおもひて又学院(がくゐん)の
かたはらにうつりける孟子それより学生(がくしやう)の習礼(しふれい)をみならひて礼儀(れいぎ)
とつて拝威儀(かぎ)進退(しんたい)ともにこそよくまなびけれバ母これぞ子をそだつべ
き所なりとて此のまゝにとゞまりけるかくて揖譲(ひぞしよう)の道
すゝみけるを孟子(まうじ)やう〱おとなしくなりたまのくにめによう学びゆかんとて母
にいとまこうてあまくまなびさせんへとてよそへくへいりかの機(くわし)
ておりけるが古れかへるまに胎教(たいけう)してしつらひぬるきよ
をもとのはたのいとをきりてのたまひけるハ智恵(ちゑ)
づきなんずるはそのはたをなかばにしてきるがことし川海さし





くいつかりとをしへつゝましてあかまにてもたゞちに機のもとへ
むかし賢く孟子よまなびくわらひてやかしくかへりて入
学をして孟母にかたる月その家にかへりけれバ母おりふし機を
おりてゐたりしが孟子に学問はいかほどにすゝみたるぞと
とひけり母かたはらにありてそのおり機をたちきりて孟子におどろきて
孟子とふ母へいふあんぢ学問よおこたりてもとのまゝバかく此之
その君子ハ学びて名をあげ問てわくしれとも知ひよりて身つよや
ゑらくしてすゝむるハおしとなんぢ学問ともをなくべけれバ
ふかり人ハおさしつゝハあくバらりしてさきへそまねるをすゝめたし
いかりかとみ中たてゝするうにてあつ此わしんや女のさとりあ

おさめていかゞいはゞ身をやしなふべしとなんたなしおのこれ徒ともおさむべきよれ
こゝろハのちいつてうつき老とかハ今いねともへるくびハ奴とか
つまそうのようかゝへし孟子におそれく志を学をさだめて
やうやくれ孔子のむまごの子思を師としてつゐに大儒となり名をその
うしろにのこすこと孟子のおれをとなの世につたへてたり孟子妻をとりて後あつ時
閨にいりしにせ妻のしゞみゐるを見てよろこばずしてひてそ
まかり孫やよいつびしをすゝめて孟母よいでしよけうらひくいてぬ
しれさうまつの女ハ妻のふるびて寝ばかり女ハあかるにりて人の家
まかりさうふべしとて文母よくへさせあへとし母それをきゝて孟子をよ
びくいひちを門よいうしへてたて見るやしきよふかくやゝひとい

たかんなる事よのがれんとして必ハはゞかりすかハ人をうとさん
とるん事よハつゝしんとして必下とらハ人のおやもちとゝゆびよるかり
ことばよ礼をもちひげして人の無礼をせられなよそむけりに
あくまでも孟子といへるおまへらがおやまちよてハそてつねよ
その妻をいさめてそのそれから斉乃まよつくへく母をしりふすめ
りもわらし孟子何となく勉しまづげよおなげきたるを母いふう
りらく敢とふくへていく之くよハ者をそのりてくめよつき孫
とやしらもうそん君子がなとりらひんバその朝廷をおゆき
るなりいさひ主よりひとしまび孫をうかまてくさつくとしんバ母
の年老くねさすゝへおつ乃くがんつされバの故なりとも母さてぬ人

のれハ酒食をとてかへ衣裳をぬふよりかのぬくし事婦のみち
よそらひしてゑ門をいでかのえわらず年ハ余りれバ父母に
つかへひあく嫁そればたまよもてじひ又父れバ子をよもてが六礼に
あくまでもそれがしも人をまなり我の父老のらりそれよそれよりの義ぞとふゑむな
はしとを人我ハたくりまられをゆりしんさへくんまつくるなりぶられ
よらんまれバのおまつバ老をとしへよあまびられとあられをみひとく
なれバ老をまてがへさめハおちらりへ人の母でかなりとなむりくをせりて
やまめしてあせとぞさんをめよい意とぞびつまつりさしてハ
はうしりつめゑりよもいつりあくせぢしてのそくへいぞ切なる
なんでしのすまりれをまとさかうなればいろんなるし

いにしへ斉(せい)の田稷子(でんしよくし)相(しやう)のくらゐに居(ゐ)けるに被官(ひくわん)のまひなひとして
けり金(こがね)百鎰(いつ)をその母にもておくりけり母これをあやしみてそれの
相(しやう)のまつりごとに三とせなりけれどもかほどの財(さい)あるべしともおもはずいかにしてかは
えつるととひければ稷子(しよくし)さやうなくてそのよしをかたる母の
いはく士(し)は行(かう)をいさぎよくしていやしくも得(う)るをとせず情を
らしていつはりをすることなく不義のことをバ心にとめず理あらざる
利欲はいれずいふとなすと一すぢにしてこゝろとかたちとあひかな
ふ事なりそれ人の臣として君につかふるハ親(おや)につかふるがごとし
たゞ子の親につかふるがごとしいま君大官(くわん)にそなへて厚禄(こうろく)をあたへらるゝ
ときは忠節をつくしおもき君のさかへ命をたて

たゞわが身はいさぎよくしておほやけに正しく忠(ちう)なりてうまく
かるべきにいまそれのしからずくらゐにそむきて忠(ちう)なし
ことぞまことそれ人の臣(しん)として不忠(ふちう)なるハこれ人の子として不孝(ふかう)
なり不義(ふぎ)の財(ざい)ハわが物にあらず不孝(ふかう)の子ハわが子にあらず
とやがて出よといひければ稷子(しよくし)いとくやしくおもひ
てありしごとく金(こがね)をかへしその身ハつみに入てその君宣王(せんわう)に申し
らけくそのつみを宥(ゆる)されて宣王ふかく母が義(ぎ)を賞(しやう)せられて稷(しよく)
子がつみをゆるしもとの位にかへしひそかに母にハ別(べつ)に金をぞたまひし
むかしもろこし唐(たう)の崔玄暐(さいげんゐ)が母ハ盧氏(ろし)なりある日玄暐(げんゐ)にいましめ
けるハちかくいとこむかしゆかりの人のいひけるそのまことありてかた

ゆかしく兄弟むつましくてよろこびあふことなき者あるべからず若きかたハしれ
消息(せうそく)なれバやがてもし賊(ぞう)とよる物のあだとなりしと告(つげ)あり
まのあたり見し消息なれバ心がけるべしと残さずてらへるか
ことさらめでたきひとつ親戚(しんせき)のつきあひハ父母あるじへ物
とりやりもだいじなることつかうまつるべきなりとて
まさしく俸禄(ほうろく)のおもりなれバいづれのときにもなきなりとも
ゑなりとみえしものハ公物(こうもつ)とねんごろにたもちやすらかんとし
しかるの器(つし)をもちてともむりんまでつかふべし
やしき障(ぐれい)そのをしへをまもりくしむべし
ようかいふかくつぬる宰相(さいしやう)のがばう両氏崔氏(えんしさいし)の母とあるを

すゝみたる人ハなり世のつね人ハおやおやのをしへあるべしハ
たゞ務ありとしひとその身をすぐし父祖(ふそ)をはづかしめざるハ
ひとへに家をうしなはざるやうにとおもへばなりそのためにハ海と
しくてゆくしたがひへたまふべし
晋(しん)の陶侃(たうがん)が母湛氏(たんし)ハその父の妾(せう)なりしが父ハおとろへてのち家
まづしかりけれバ母みづから紡績をつとめて陶侃を
やしなひなりつゝよき人のをしへにしたがひてかしこきなと
ゆくゆくなりけれバつねに世の人つひに名をなしたりときくなる時
范逵(はんき)といふ人鄱陽(はやう)より陶侃(たうがん)をたづねて来りひをよりてくれ
ともなふ人もあるひハ多けれどもまうけべき秣(まぐさ)なくいへりけり

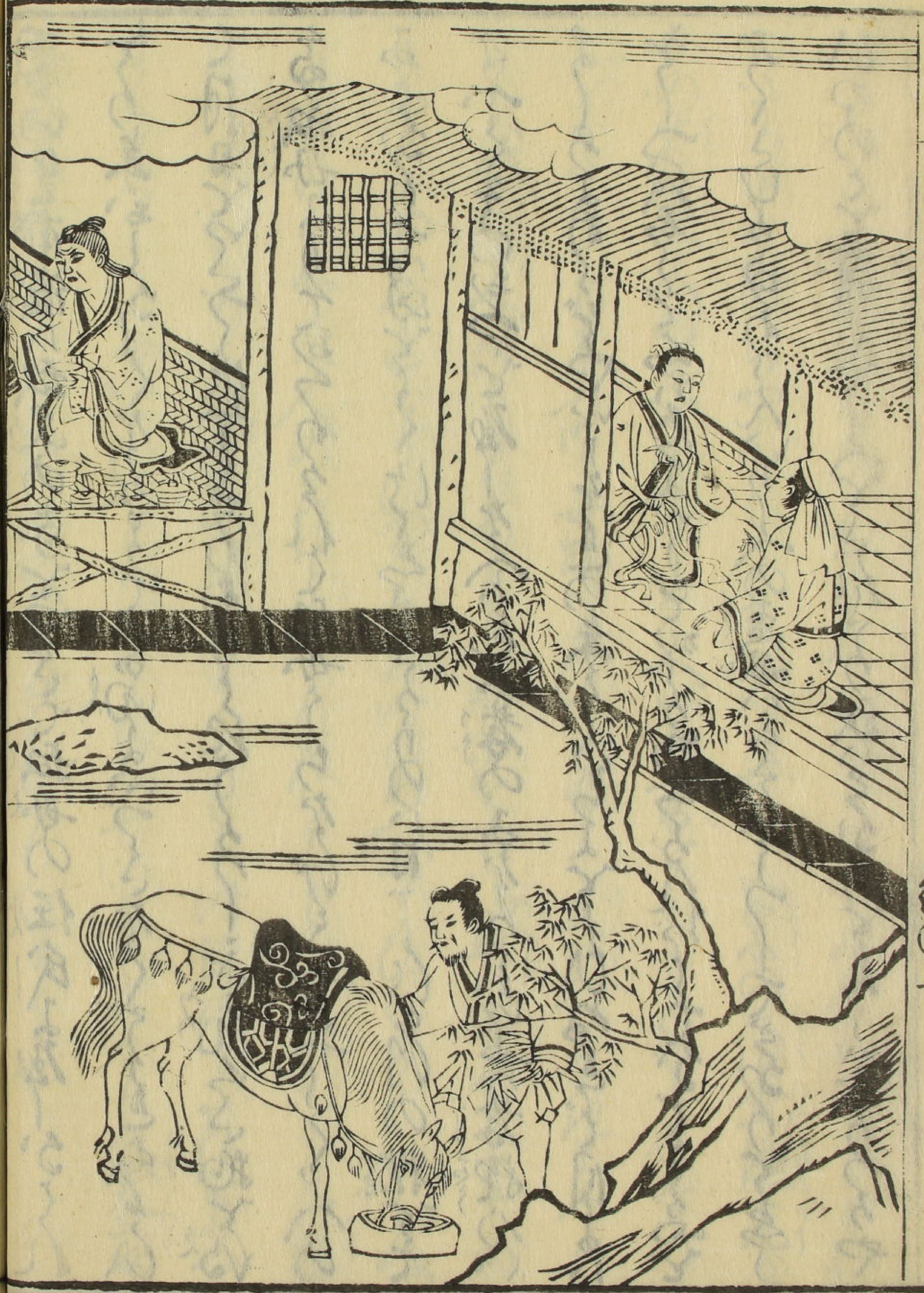
けまで母いとわびしくて酒やよきさかなもこしらへ
とゝのへがたくみづからそのかみをきりてうりてさけをもとめ
どうなりつかども家の柱を切おろしてたきゞにわりてゆ
さ物よりかへて酒さかなとゝのへ薦をもかりて馬にかひければ
まうけてたくはへしてその夜のまうけ人々とぞありてわけがたき
范逵ことにかんじて賢なる母なりとほめけり母より子も
いよ〳〵めでて陶侃をほめすゝめたりそのゝち陶侃まかり
はちの川の河おさしなりて魚をとりてそまつりそれを母へ
むかへの親に魚のすしをおくりけるに母そのうつはをかへし
まうさく汝くだしたる魚はおほやけのものなり我にあたふべきにあらずして

こそはむさぼりつめおほやけものをわたくしにうけて我にあたへ
かへつて我にうれひをそふるなりとしかりて返しつかはされ
ければ陶侃おそれてかしこまりてそれよりいよ〳〵心をつけて
ぬかりなくつとめければ世のためしとなりやさしぬ
まさに府のつかさよりのちに長沙公に封ぜられけり
小郡の魏溥が母は房氏なり年十六にしてやもめとなり魏
溥はおさなくしてちゝにおくれしかど母の法をまもりて
しとやかにしそだてゝかしこき人となしけれども其の
御ぞうれたるか人のよからぬことをいひしたれどもしてい
くらせとりてなんぢらはおほやけの事うけたまはり寵あつてお

さきくらん魏滑くひとらしめていまよりかくのなやみくしくれ
ころりよてのちやうしよの是とゆうせり又宋の張奎張亢兄弟
母の宋氏二人の子をそだてしにいとき書をよましむるをきり
あさまりておそかりけれ母親しく学わくく文字をとへまつり
とにかくつまへバいとよくあらじめをきて式ハよろし事の
こふくあるハさまたげとひおもしすてけれハおのへさいつくひともせぐるやみ
うやましけるほとに二人の子むしくたるたちくゝかるびきうとし官
途にのへかりそる兄の張奎ちゝまりし時碑のほどふれよおや
まうへてしかバ母いとむつかり杖をもつてそいましめく張奎の
うくあそくかくより後ハ酒のいろひをもやめけるとかや

列女の皇甫謐ハ叔父の家にそだて叔母の任氏に随ひしかとも
ぎりよからぬ事いふをいたさずひとの学問にふつくさなくもあそび
て月日をすぐしにければ叔母にいはく汝すでに年かさ凡人にて抱を得
みるに叔母より叔母ふかくなげきていはく人の
みをおもりてもよく汝そのいのちハ日ごとに孔門の壮をぞ
なへくそのおやを孝してもとめ父よりも孝の子ならずとの六蒼抱く
よしやよくぎやけ三の年くくらちもとをもとめ父とも月よく
そへつ我と父ハたよりてとかく抱くつれむそて年々かとせうふとゆ
なくさむくかわんいふと人の孟母か三たびうつしてさとりとも
ひのれのことに顔くちくしへとされてひらりてかへりつかや

ともへのみなぐさりつゝやすんずれバ学をもしらしく身をもおさめん
しハそもそもちゝにあらずかのそらふハよわくびあひろまへて我
とがこれそしなきかなくよくせおさくてたちなれバ室
閨鑑あらくらびてゝそそさりしよりむこゝゆかに学ぞとこそあて
やまびかてれたむろくしてみちのさぞれそのさこむしはよ
たゞしてなをとめの世まぬときり
宋の諫議大夫陳省華の室ハ馮氏なりその子三人あり
ふなたゝされたるまわずまつりすゑの子陳堯咨ハしかさうち
のよもよく小中丞とよばれしあるが荊南の太守となり任
よりかへりし時母のもとへまいりて母對面して荊南ハさう



なれた大ハ世なりされはまるさりしかしいよいさまつりごとにも
のおりしはりそとひろれバ荒沼(こうこくし)とうものゝ子にとらんたびゆきて
ふようざまつる人ハ荒沼がこゝろのまゝをすくしつゝやまざりのなく
くひつかところれバ母親のもしにぞといふやとうしていろく忠孝(ちうかう)
外して世の政(まつりごと)をたゞけりといふそれの父をも人をさまかれとの第一に
あそぶやまひまとことろかどもの人知るすれ政(しんせい)とおこなひ(けいと)と
うれたよさらむくまそれとあわれてものゝ世一人の慈(けい)よのと
語らしげかゝりてひとむもかくわさまうしこうかまてとつ
まさにゆるりしほうて荒沼(こうこくし)ともうさるれバ宋帝(そうてい)の令息(こうぎやうてい)ハ衣地
まあらよろりそれ人の母としてち代をしかるゝものゆかさは

世のつねのさがなくぬくはなりしぞうまかなりされバたぐひなく
すぐれたるぞうりてそれハあしあらさいなひまぞハなくて
ぞあらさんぼしそれまでとも其のそしへよりていさ人の
なりさる子ともあハされバ其の筆にたむさいまりてそのことぞれ
よろしき人のもとへひげのふてうり
隋(ずい)の鄭(てい)善果(ぜんくわ)が母ハ崔氏(さいし)のひとあなり栄陽(えいやう)の鄭誠(ていせい)に嫁(か)し
て善果をうめり鄭誠(ていせい)隋(ずい)にはんして周(しう)の人とたゝかひうち
死(し)にしけれ崔氏(さいし)年わづかに二十なりしかバ父(ちゝ)あハれみてこと
人にあはせんとせしかども崔氏ハかなしみてちかひをたてゝこれ
善果(ぜんくわ)をのこし子なげきていかでか女ハ二たび嫁(か)してのちふたゝび

人のおやハこゝろざしをつくしぬるハ子をなさぬまでとおもひさだめて
ゐおやのまゝ子とおもへハ善よおもくせんなき人よそむくハ礼よあらん
されバかゞみのおやとつまとてハ我身とぞ思ふ髪をきりてんぜ
ともいふべし礼よそむく悪とすてんハ何たれもゆるさじ
この事いせつやこの文せんどなくてぞやゝ若果ハ父が六死よ
かわりて年たけてはさあのまんと大将軍よなさし県の名よ封ぜ
られ母ハ文魯郡のあるじのかされたる母賢明の徳あり
てよろづかしこく女のおしへよくさとりて政をとりもちて
おさまりけれバ若果も公事とよろづ母よはかりて
物ごとすゝみて宰判をよくおこなへバ屋あまへるとゝのひて

うちにもそとにもしたがひて物ごとひとつもかくさずなくして
とかく母の心をたのもしくおもひてうやまひつかへけるが
母このむすめをやしなひそだてゝ袖ひきよせてかんざしをさしつけて
でゆるしめて若果をそんじて家のまへよいとまをつかひげよ
をんなおやがそのかくれなきことぞ我子をおもひのかなしさ
さりとてもなくてハ母もおもひけるをおもふにまかせぬことハ
まことのおやにおとらずしてこそおもひけれバ我母なく
つぎ人の孝勤の事かくありて世の中の人をゆるしたるひと
されハとしごろわたくしをすてゝとゝのひて身をもそむかず
ておやのつとめをつくしてこれをほめてしたがひけり

ありて父のおぼし浅からぬほしくおもへふまりかの孫がひなし
されども其ものといふ氏をまもり父をまもるとも我はしやもあは
男子なきはめでたくおしきかりふくれはしとなれかし
なりさゆへよそれものとてへよあらうどして忠信の家をたてさせ
みん孫なるべくおもふ分にはよりて我ながらいひうもなく行わしさ
なかりしなくてはおしもとれ其孫はなくさんのふさしと景行の
うきよくもかくてげふさ浮世でもとて其のふ乃いまも童なら
なりとものよ烈女とさひるになくせしまへつめもれの息也
てこそ母わりやそのへおそれはあらしごろよかしとわしそそうを
何事ぞやかしとおもひものいあがりて織るとあやまりいくあく

じめには家の風をおこしてつゝき後をたゝなひおきよ先祖をさ
てつらそぶかかるべしかくてまれ世をさうん時何のめいぼくありて
されそのへよふしらぶらくるんてえまれあらくるうしとおもへる
見られるめりと云ぬくいひさおしろく家すでにまるうる名代母
つまさうしつひどうして老しませてよつちど若果んをうて事まさひ
命と也いまたそれうし母の後に封ずとも後はらの民やよおかり俸禄
まあらくびてらうそりのみなうちれになとうそふ事をしもたちやきとあ
させまいらうらひさろまことていらくそれ行のはすでよおとらびてやう
やく汝のとららのをもらてかじとおもへるまたさよこそおかれし
孫つる是とまの父君勅のほしくひなければその恩厚いおろぎまと文

のゆゑに世にあまねくしるべしいにしへよりその妻子(さいし)のありさまを冀缺(きけつ)がし
ことにせんやまことにうつくしきかたちハ王后(わうこう)よりしもさまで
男ハどこにもおもてさびしくきよき女のつとめづからざるあり我独しるをそれ
おもハ法をおそれてゆめゆめそれはとるまじ鄭(てい)織(しよく)はうつくしけり
後ハきよしやうとうちすてゝせん衣裳(いしやう)もかざりてはならはねバ
ぬのをときのみ世に倹約(けんやく)としてしたしき祭祀(さいし)賓客(ひんかく)のよはひ
らざれバみだりに酒をのまずさかなをもて親にそなへらるを
もてなすくをよくめぐり親戚(しんせき)のつきよろこびかへるの事あれバ我
きゝもてゆくハ心をもちいその方にゆくべきそのゆへにけふ
まじはりかたよりきたつてまうけハ荘園(しやうゑん)のなかにひとりおくやその

なかりのおほく張(ちやう)はそのよれハおくり物ハ門にもいれず是(これ)ハ善果が
おさめさせてハその孫(そん)勉の官府(くわんふ)につかへ其の物ハたまく
しにけらひさ或ハ府(ふ)の濟理(せいり)とならへ或ハ下(し)ざまにまじはる事をしめ
善果ことによりて清吏(せいり)のかゞみなりそのまつりして天下第一に
えらばれけるその姪光縁御(?)よりてまろかなる事どもされ母のたすく
るゆゑなりけるや母がまつりて後善果大理(たいり)の職(しよく)をつとめさせ
しときのこゝろひ母ハ世の内でもりのかゞりたるや崔氏(さいし)人の
妻としてハ貞節(ていせつ)をまもり人の母としてハ教訓(きやうくん)をよくしよき
君主に忠(ちう)をつくし下ハ吏民(りみん)をまもりてこれをたゞしくし内にハ廉(れん)
直(ちよく)をもてたつのちかよりは恩愛(おんあい)をしろしめしほどこし君子(くんし)よまことにあらず

かくれなきまのちぎりなどかはらぬしるしとたのみしことぞあはれなる抱なり

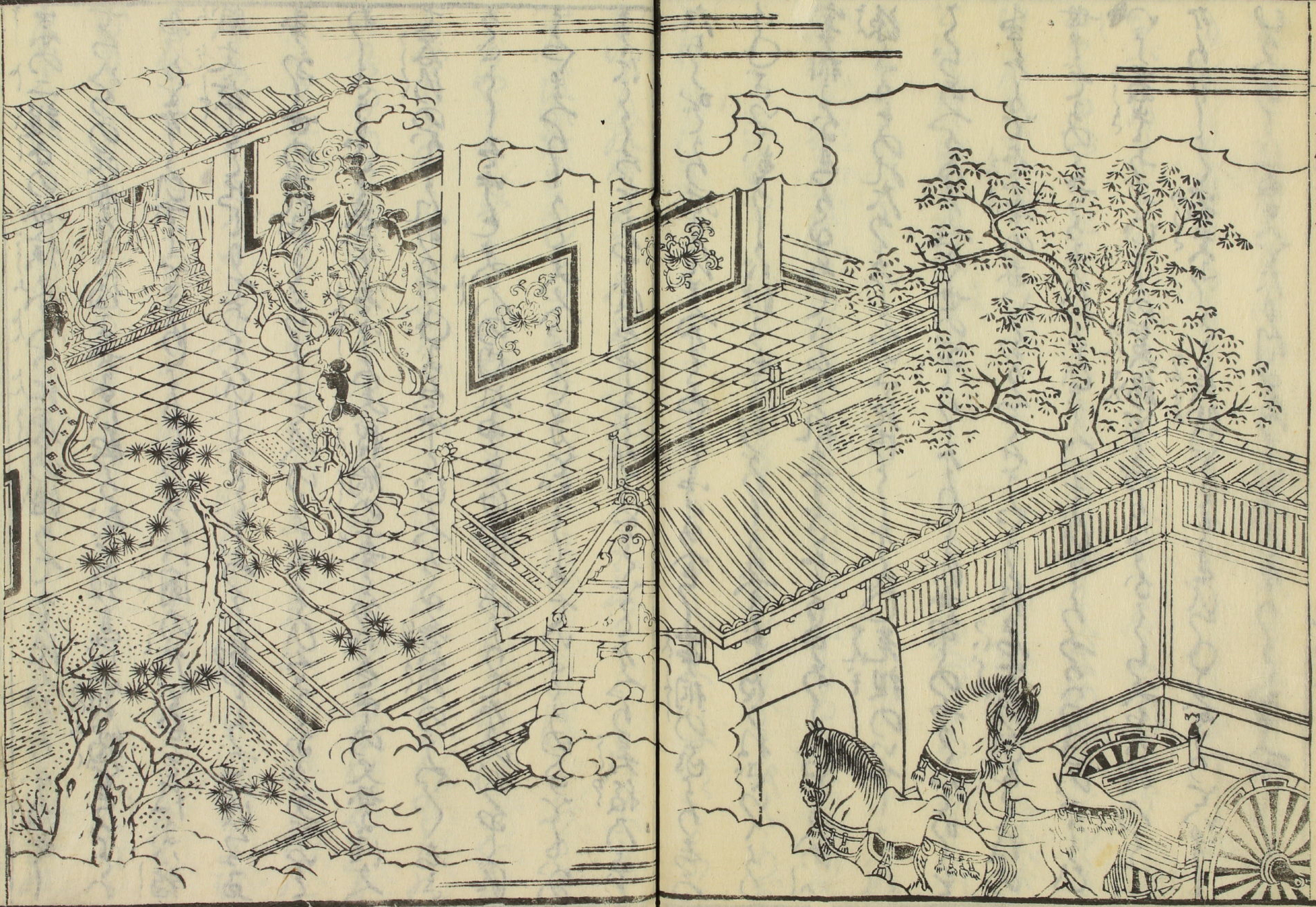
比賣鑑紀行巻一

紀行第二　此巻ハ第一乃末のすゑなり

唐の柳仲郢が母韓氏ハ相国韓休のむすめなりて高家のむすめ
なりながら柳氏の妻となりて家をおさむるにつけてもふかく倹
づまやかにしておごりけれそのうへ宮家の栄華を清として見よなしへ
の柳氏よ入りてより三年ほどふかくつゝしみおもひてかしこさその
にゆくまでうるはしきすまゐをおもしろう絹のきぬを着て
ぞくと施おしこさねひかりをかくされ里へ入りきる時も金銀の
いうそくの乘物よりもしで竹のたかしといとはりうぐしく青
女房二人をひきぐしてひとり仲郢をしびよそのかれみどりをも

幼(よう)かりし時は苦参(くじん)黄連(わうれん)熊胆(ゆうたん)などいふにがき薬(くすり)ど
りとつき合(あは)せまるめてくすりとなしあたへて夜(よ)すがらねま
おごらしとたゞそれがなりひ書(しよ)を読(よま)せねぶりを覚(さま)して夜(や)
学(がく)をよむべきやうにをしへたりしぞ母の勤苦(きんく)をかんがへさ
むかしのためにとて我身の艱難(かんなん)をしのぎてきうじてよそはさへまつりしくをへ
と韓氏(かんし)は海(うみ)とし慈愛(じあい)ふかく思ひやりよまの後(のち)のよろこびとなれ
子(こ)ありしがおしへのほどしるし
宋(そう)の世宰相(さいしやう)李邦彦(りはうげん)の母あるとき孫(まご)のおほくあつまりたるを見てむ
しらぬのやしなひ時白(しろ)き孫どもいさゝか志つらふかくいさめ
されバむまごをもつて世をしらせまおりへり母のいましめ

たらしかぐらのみちをしへけるに宰相(さいしやう)の家より志(こゝろざし)
ゆへござりしおもしろけれどもしらぬことぞ人ねむりくらう
宰相(さいしやう)ふかく思ひいでてこれにより人の子
孫(そん)そののちなりてしなれば先祖(せんぞ)の家(いへ)をさそ
ところあるなべて世のならひなりとも女(をんな)のふかくかくそ
事なりとも宰相(さいしやう)の母はいかにせやうれ名言(めいげん)ひとつの
世までそのことをそれひさへつきひとつのものなるひ
いよいよ富貴(ふうき)にしてもその貧窮(ひんきう)をしりかゝる貧賤(ひんせん)のく
なりしよく富貴(ふうき)のかく貧賤(ひんせん)をよろこびつゝのおこりといまし
しるふかくば家をたもち行(ゆく)べきなりつゝおもふべし



宋の二程子の母侯夫人ハ仁厚の徳ありて文人なりけるがよし
たくハくの文あるを読よ女子ハ物かくなど世上ハ翰墨をとるとい
ふものなしとて書しるべきにあらずとて國のことをかぞへよハ詩
賦文章をこのみてあそびしことをうつし置て八きくる事
事なし世の女ハ物をきらしくして人のかきてあそびぐさとなるをいて
あしきことぞとて中ゝ史拾遺の妻の行ひを中の父母をはじめ人
て落胤のかまれありつゝよろ中しむくろの家族のうやくふとき
くごとし其中とも夫人の心ハ母をけおかのかけてはのふかに
うやまひけうし夫人ハよく身をおさめていさゝかのまちもなく
またこうがそそうかハれを中ゝよびいそぎてたすくへ昊役乃事

をゆるさハれなかりけるを愛せらるゝほどしたがふこと
なくじんぎをおさむるを母ありしけれたゞしく和にふかる
すあやうかりておそくしれいやしきことのべくとうちさいなむすぢき
らへりそのことうかゝひをくれバをのれをとのかれそのよばかりなれ
あるゝにある時ハ母をまもりいまもあさいく幸齢のたかへとかふまで
へさかる時ハおかさぞさぞなへぞちゝうもつぐ年比によろしかひがうりれ
まもるやう其中おさむべくいもつ時にまさくるかくぞなひなくむ
されどみともののやまられる時ハすゝしもゆるさびしてとゝまとせ
むりしおりたるにわたれバ其中よくつかくうれといひまもあるあなればあ
たゆくハよはゆるそのゝそこ人の子にかくしむりそろ在ハ母子あれ

とかくして父のこゝろにかなふやうにせよとのりなりおのこに
かゝりしかばせうくたゞふかくよなりぬそのいとおしさかぎりなから
盈えれども人々ふかびく年八歳すぎ候かしおきれゆへ時たちしかども
こゝろふかくあまた人のあつかひで子かへなるをせぐのすゝしいふ
まことに母のみちにかなひぬひとくおしえつるぞとよ
かふありさまなどろうなるおしへやうにしそのいきかたもまうる
ちごろまめやかにさし合時はついにそのうちにはすいへありぬな
どをのぞまぬものあまたいさひとつにせいくおもきより物事のこ
せぐはおしあびてはいかなる人ともゆくへともあらそはのかたりにもとゆかさ
そのしんとあしそなるあまたみのうへすぐれてそのたより成

ぬべからていかくかへまりがつたくとゝもひくのびつくつたしをせいざれと
うたすとくつよりて二程子のちまでも教令をうけひなく人とあら
そひのこゝろをおかりさ成人のねらひよ聖人ともひくとても
なりせなまれける時は家におさめぬれどもよくしくのそおもとりて
程子つのくりその徳をおしあたえてくしきがゆへのみたとおとゝしの
世の儒宗とあがまつり明道先生伊川先生とよばれたりその母乃子と
そしゆるめるはおがまやそのすけいはいずりなり二程の母
そをけつながらあるしずしてそのみの徳となりしに世の一母
よりらぶるかくして父にゝてせざるとは母のあとれをおどろひあへる
いし深ゝまずひぐ程母はひのかくてはるゝひとのひとされてある人を

くもゆゝしかりけり
宋の和靖處士尹焞が母は陳氏なりきはやくやもめとなりけれど
もいさゝかうれへなげくけしきもなく家をおさめつゝしみて老の
和靖がいとけなかりしよりひとへにまことをもてをしへけるにも
いひよつきても礼法をさだめやしなひとかまへつゝありしも
経義をさづけ伊川の程先生は聖人の道をつたへ給ふなれば
其門に入て師とせよとて学問をさせけるに和靖いとけなき
ころは程先生の師につかへ学をならひけるにその
てもこまりけれど母にすゝめられて和靖はいよいよ学を
師とせよとて学問をつとめさせけれどもはや及第とげずしておちく

ぼりしかばまたその禄をもとめず世をつく
さむやとせんやといはれけるは母かくいさめにおよび
ければ母よろこびてげにまことなりとて和靖にむかひ我日ごろ
そちの君だちとなるをのぞむにあらずひとへに俸禄をも
てやしなはれんことをねがはずただひとへにひとへなる
つくして賢なりけれ母とかく感ぜられけるに和靖それより
官途をのぞまずしてたゞをしへをうけまもりけれど世の人つたへて
うやまひいよいよ名をあげけるにぞやがてそれほどにぞまれなる
とあがめ君とうやまひてそのはじめをおもふにやはり賢女なるか
漢の曹世叔が妻なりそのうぢは班氏なり

と照らしふるまひ法をまもりてみさほたゞしく礼
法ありて才智世にすぐれ学識もありけれバ時のみかど和
帝しばしばめしのぼされ后夫人の師としてたびたびめせ
あひき曹大家女誡七章を作る女誡ハおんなのいましめなり
むかしいまの女のかゞみとぞなりけるそれよりさき漢に劉向と
いふものいにしへよりいまにいたるまで女のよきをえらびて列女伝をあ
まれたりしかども曹大家注してもありし文その兄班固が作
りさして死したりし漢書の表志をもあみてそのりをうけつぎさた
めけるそのゝちも長くとゞめしけるに曹大家ハおくりて
のちあまたそれ丁氏の女をあつめて寒の

歳十六にしてよびめ丁氏まし曹大家が贄つくまいりぬ
才ありけるよしそのまへ唐の陳邈が妻鄭氏ハ文めでたくして
みちれたるしかれども女の聖賢の詞をけずべるとぞみ
うびよハ必ろびくりそてよもしひとり人事を孫ひきる
つるそのふきかのむすめ永王の皇子の妃となりけるを鄭
氏そのしうとりして女孝経といつまきいふへのたまもありける
のおしへまかりけるをへことに此ひろれバそのためにて
書十八章をつくりまいらせし曹大家が女誡のふまりしつくる章にれ
つざくハいにしへの婦節をうつして女孝経となづく表文にいう
なんそへくちかやまのともまもりそのや女誡をとりしか小女の法となる

てくらをあらはそぞ世よのうしろ山かゝる女ありてそれへのぬるを
作りたるハ唐の長孫皇后の女則十巻あり元沛在が妻
劉氏が女儀一巻あり尚宮の宋氏が女論語十巻又王濟
が妻の楊氏が女誡一巻又まさ羽翎よつて后妃の徳
をつらぬることもあかゝり
まうがまよむし比叡山の恵心院の僧都源信といひしハ
くまとなきさる僧なり父ハト部のなにがし母の姓ハ清原なりし
ハ大和の葛木の人なりけるが父ハおさなくてまかりてその母
父のいひとさるかよりてちごとて山の慈恵僧正につかへて
師よなりしかのちに性人よまろく年十六にて内の法八講

よ問者とよくきこえけれバその夜すて僧都よなさせあへりける
くそは故郷の母こうしたく家をもひしくなりぬ僧都ハさじ
をぬうくりとくれじちうしうかうよバたぐおもいでうりすぐそうち也
ぬあるはさりぬべきことよ仕事しけぬ年師よ贈もの ちく布へ
誰がどおかくえてたれバいてこまつりてそこ母のゆへ
さらくもりける世のけくひをたくしくたれバつよまうこ
ざれあんともひろきにまされそうんくきそじきさつてふあく
いしやへとぞよ子に母のつひろやう叔への母でうりそたなぞ
あんといおりうくそことを給はそそくべかれ家のつて
きふつくさもさすかやしくていさまじられど文もとれちね

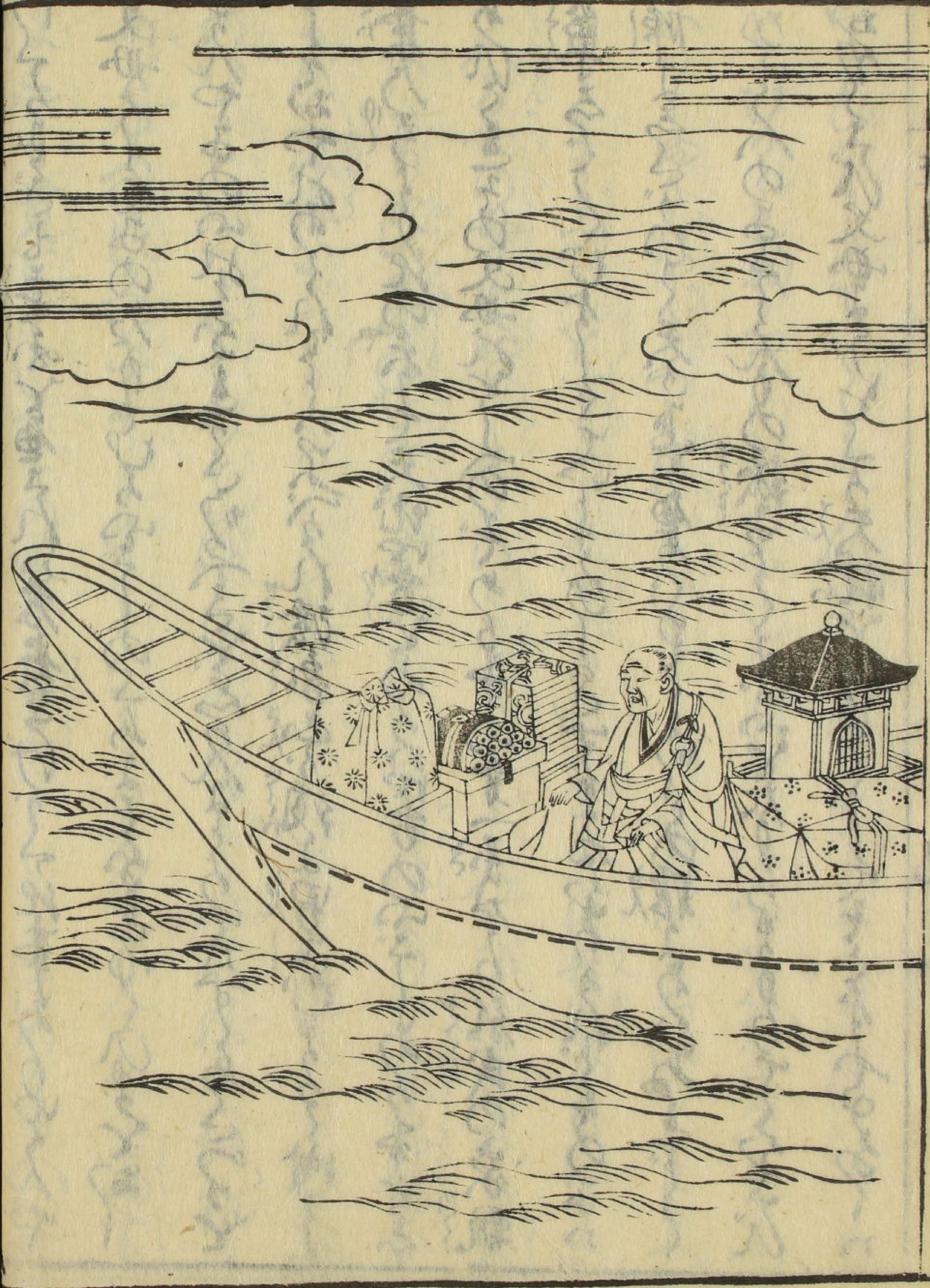
乃世たをうんとおもひてしそいとむしかぬうし法師になりし法
されど年ごろハものりくてすぎつるといはれく名利欲ましく悪
業ところ〳〵れ浅ましさましつひとせうぜ人ちらちらもれよなり
儒教をれどもてよりたんにいよ〳〵名利の根をきらさりて
仏も儒教よりくるへどさりなる筆の心ちより横川にしりぬる
てけるあるとなんひとれハ世すハちしけれゆきすぢでとふびきてひとゝ
ともやれのその八ひとるあおよおもへれどもいづきの为すもその子に学を
つとめさせ儒をかしなんくとおなすくかくらくるけましきことをへさ
すまいよしそいかくの田穣陶侃が母のふさしおもちくらんり……
ゆくしまた太るの洪門貞教にはりわをしまつりて法をりしせんの心

さしわきてもさるが母のつひに仏ろしくあらでつくされぬがかなうなり
たゞあやでうりてそする天竺のすゑよ宋より来りけるあさむか
ひがよのたりそんくつきさてんをとされど六千よをよぶ母ひと
日本ありすそゆきをなんのハ孝行よろづの道をとぞまりるんとすれ
ぞ景懐をとくるお事るしおりひとつひてもとうくそうち佛ざさるす
かれがつるよ母とりふさうきわり母さをてあとをおこめ老のゆへをよう
がよれ家をさはめ納を色とくへの世へおりひとりひとるかしてかれが
そくおりへどもおさでに祝が一ひの婦くゆもつるよあでくしむろうす
りあくゆくしくてそハさひさきとさきこうらが老の身をふきまいけど
しもくゆく孰ひの世のあまへとまり貞教をしてつびけうかくび

一くひなくていのちめぐみの万人にこえたるしめしともよくして
とぶびかとも我かれをおきまつりうしもひれんよりおなざりきと
おもし海さんおきうつまれそむきまいりすべきゝとひつるよう人
わらくわさふさゝとすゝめさせまいらせしかへりて此善縁なり海とよ
八万四千の母とそおもし海さびしうさうなくまひくすなは宗
まへかり浄学六ゝをかねて蓮比をめくりも明師よおもひ大乗経論を
らびよ仏像をつくりしめくえそうへわ二てふび母よおひそうれ文母
のいまと時なるそのあそいひとへの子のつくりのふ孫なれば此れも
あさゆふのはうへとすゝむるゝかるゝと孫がうへされども尚書
まさく貫とこうしてその父母を孝養すしあきハあさくへの世

わくりぶさも孝をおもさんバ孝をさゝげかくる此事あるいハそんや
父母としてそのためにしむるやうのかならずまかゆくひまをおし
まんやまのふれもふるまでかゝるべきことをえんなよりてすゝめくうつると
こそおやれおかくれもいへべくれ薬師の願ふかく男子ひとり持う
孝行の子より此の家にて天地四方とおもへ四方のふぐしあるの事を志
あれしまつその父母とゝへのぞめる事の中一義なり顔氏の家瓢
草ちてくひなくしていゝきひしさすゝまるおもかくれどもその子ハ
隔よりさうゆく天か下を貴めものゝとこの雖よおもひあきどく
ひとびへの子のうへ人の孫よりくりもとかいをなりつゝまのりてゝまさび
おもいさび父母ようきを天性とまくしてそこなすみるべくハ

などやそのひざのうへに眠くやしなひまゐらせん命をしたへ奉るか
ふたつなきゆへ日ごろは二親をそなへてその父母を身にかへてもとなんと
六巻のふみなんどよみしとぞ有
むかし三井寺に証空といふ法師ありその師智興やまひにふして
てをもくなやみけれどもいえざりければ弟子どもも安倍晴明にいのりをさせければ晴
明がいはく師の病はすくひがたしもし弟子のうちにかはる人あらばいのり
かへ奉らんといひしに証空法師すゝみて師のいのちにかはらんと
申しければ晴明ふたゝびいのりけるにほどなく師はたすかりて証空はもと
すでにあやうかりしが不動いへる法のあはれみをかけ給ひて証空はたすかれ
前世のやまひも師もともにたすかりて死をまぬかれしとぞきこえし



ど我一人の母ありて年いたく老さらぼひてせば死りてのち
あつかふものなしいかでかへんくしくそらかばかれて母のありしを
ゆるさせ給のよしをうける母をすてゝわきさるやめわかへしまゐらせ
たかあるがごとくもぞてきてやう我老てそへてあけくれとまいらする身か
是ばかりをひとりでぞ子のこゝろにかゝるさすてはべりべし
とおりひきやられば師の命にもそむかんとぞ此世までも
こゝまで来れるあらんその事にはいさゝかも心にかゝらずあらめこと
そあしませ我けうとありければ曉空は
りひかりなく向にありて清明を請じてこの法を
らみちびけるまつる感應によりてや師のやまひいゑてくる

身もなかりけり曉空はおもへらくされどもその心ざしいかでかべし
それ人父母あるものなればむなしくいたづらに師にあ
らざればおもふにはすてて人の世まじはりてかなはぬ身のちかひによりて之
なくまゝあまたかへりてすそまゐらせ恩をうけてむかしよりのおもふ道
たゞなり曉空が母師とおやとの身かはりてつくしけるにこの身
がこゝろざしのふかき事のたぐひなくてむかしよりかゝるゆし
いかなるひとなれども師の身に浅き深きあはれ人やうる密語業を
又つきまくらの師のそばにあまりて恩をうけてかなしきを
徳会の執念は家を撲る時の母妹は仏前にまゐりてみちあまの
下縁となる時告るを請けて嫁けてわたり深きの

座をたちて禅尼ハ小刀にてゆびのつめをきりきられげうと
の城介義景その目にみけるにはゆびのつめおちてながるゝおもとこう
そこせはんさやうのことをゑんそろ共よはしやされたれバそのおもく
わらハかさらによもさり給ひしてひとつゞつ事けの義景と
かゝどうのへいつんおそろうかよやうとくのべしかぶつまはなしくらしく
やしなひこそされたるはたる尼もはよふさかくしとうりの人へとおそど
とをなぞろうくりげざるゆくてきえぞきなりおいやおれゐるあひどうり障
して目かゐまとうんじへよりかなかうやせてふかふあへあかなうとや
されけの天がかまつりごとへのおやあれどおおりそとのすべしして
くけにきうふさせのそろハ其の放れ武具よ小破の明且障子を

くるゝまであはれみをこ孫のまゐりせしに其日ハえをゆはりあへるき
むさぼりよくやほこりにおごろのあまりなめしく禅尼ハ前九殿盛長が
孫最明寺入道光智が時頼をそだてねんごろにおしへたる時頼をそだてし
て政事をよく治め世の乱をしづめてなさけの人のまもとも天下を治
建武のすゑに楠判官正成津の国兵庫の湊川にてうち死をよ
てより先子びのいくさに先達ねとをりひそかにめされバその子帯刀正行
十一歳になりけるを桜井の宿よりかへしまゐらせし正成うち死しそれ
ありし代てその子びとをかへしておかしけるに妻と敬人ども正成が首
庫にありひさし時にひとつけるすそのありてありひまをきそめ
かれがとしとそのこびのなみだの目をさぐりてかわりさ海とむかへくむ

祢のりごしふかくして涙のいろもかはらずありし正行はおとなしく涙を
袖におさへつゝ持仏堂のかたへゆきけるを母あやしくおもひてあとよりゆき
てうかゞひ見れバ父がかたみにのこしたる菊水の刀をぬきはなさんと
うかゞひしをおしとゞめ、すでに自害せんとするを見て母もおどろきて
とりつき涙ながらいひけるハ栴檀は二葉よりかうばしく頻迦
の鳥ハ卵より[illegible]にすぐれたりといへり。なんぢおさなくとも父の子な
らバなどか[illegible]の事をわきまへざらん。[illegible]楠判官
[illegible]おりし時よりなんぢを[illegible]
[illegible]
[illegible]討死をとげ[illegible]

のこりたる一族郎党とゝもに[illegible]
[illegible]それ母のいましめ[illegible]
て我のちを継ん[illegible]
いかにもして父の名をけがさず[illegible]
[illegible]正行これを[illegible]
母[illegible]
[illegible]
[illegible]母[illegible]
一族郎党とゝもに[illegible]正行[illegible]
[illegible]時[illegible]文よ[illegible]武略を

おしけれども母のちからにはよりがたくとあんじさり
相模の国小田原氏政の譜代の臣清水上野介といふ武勇の士あり
その妻もさすがものゝふのむすめなりければすぐれてちからつよく婦
人なりけるが才智すぐれたり又よくれいぎ文道慈悲ふかく恩
愛あつくして家の内の一党中間までもつねにその恩をうけざるぞ
なかりけるある時山上の社にまうでけるかへるさの坂ぐちよりあまた
て大きなる牛を儀二疋つなぎありしがあとはし二疋とりけぢ
よりはなれおそくして儀のおいはれかどにかゝりてとゞまるの家
かけ堀のきはとせうじ牛は谷そこへおちてしぬばかりさかり
よそにありあはせしものもみなこれは半ひきあこれにあはじとにげ牛は

いきほひなりてあへぐ婦人これを見てかくありきてふたゝびたすけおく
ものゝ人とともに婦人手つよく牛の尾をとらへてふりまはしすゝまより
婦もとつゐに牛をひきもどしてとのあかり半
してまりのひとりの見ておどろき古よりひとの婦人のちからなるは
あるまじと思ひて後に婦人ちからのまさることを思ひしが武勇の名を
とり母のちからとぞいひける大かたならぬ武勇の人にはあらねど
むかしくだくさきの猛威をふるひ関八州にうたれなきもの一騎当
千といはれしかたのつわもの勇力もかゝりて傲慢無礼なる事おほ
し母はことにしんにうれしく思ひてちからをかくして先陣にすゝみ手
柄をあらはすことつまの勇なりと大将のかんじ給ふほどなれ

楚の項王ハちからハ大木を抜ぬきいきほひハ鼎をもあげしかども
せいか烏江のほとりにてつゐに命をうしなへり張良ハそのすがた女の
ごとくなりしかどもはかりごとを帷幕の内にめぐらし功を千里
の外に決し一言ハ大将としたかひ人ころのかくれなき事ハまことにすぐれ
ちからにあらず兵ハ八歳にしてすでに戦にかちて人をあふ
がぬ器量ありてわかくさかんなる人ハおこれるをめぐらす謀をもつと
しも君に忠のみちありて欲すくなく文にも武にも軍法武
略を鍛錬して敵をなびけしたがふるぞよきさむらひハ八幡
宮をまもりぞそのよはひて人をあはれむ義礼弓矢を
はかりごとひとつに武略をまなびて上野国の武勇までといふ

をはふさんとするものハさらにわろくおもはれまつらしらずと也川結ひ
将のわざをひやうぢやうがくにハよく軍書をよミ軍法をまな
びひろく智仁勇ふ智謀武略の勇士となりてよく諸人をおそれ
しんじたる母の大力ひとつ九山をもおさへおもろきものの
をなまとはうの勇気をもあしらはうけんと
凡理にはつく義理なくあくの血気の勇とおさへ
智とおもろかれ義とをりんずるまみちびきけるをゆるべく
ひとすくなき世のためしなるべし

比賣鑑紀行巻之二

比賣鑑紀行卷第三

目録

緹縈（ていえい）　列女傳
曹娥（さうが）　後漢書
楊香（やうきやう）　五倫書
陳氏女（ちんしのひとめ）　古今列女傳
趙娥（てうが）　後漢書
梁奔　音釈列女傳
珠崖二義（しゆがいのにぎ）　列女傳
朱娥（しゆが）　古今列女傳
附　梁氏女（りやうしのひとめ）
附　徐彩鸞（じよさいらん）
附　王廣女（わうくわうがむすめ）
附　衛孝女（ゑいかうがむすめ）

吉備内親王　日本紀
藤氏近嬢　同上
高橋寡女　続日本紀
安良家人　日本後紀
清紫苑女　後頼髄脳

附
衣縫金継女　続日本後紀

比賣鑑紀行巻第三

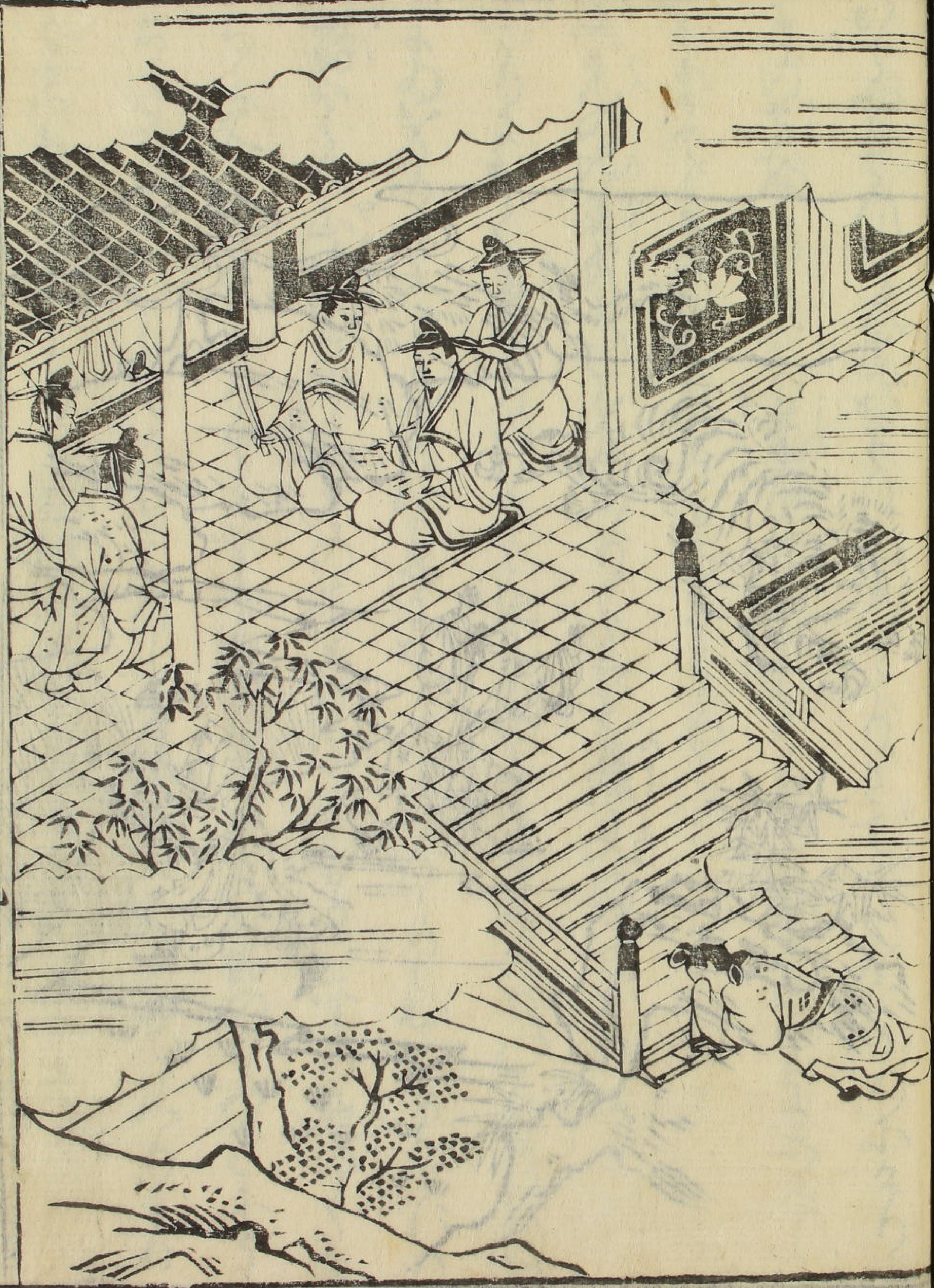
紀行第三

此巻は人のむすめの父母に孝ありしゆかりのことをあつめたれ
すなはち小学明倫の父子の親のかたにのせたるおしへなり
漢の淳于公がむすめに緹縈といふ者あり孝文帝の時に淳于
公斎乃令に流されありてぬすみがおやまちありて死罪におこなはるゝ
べきになりぬそのむすめ五人ありておのこなしすでにとら
へらるゝときおのゝしりておのこあらばかゝるときもたすけと取
りなさむにとこそおもへとなげきしかばそのむかしをきゝ
とがめさせむとおもひとぞいひけるに中にも緹縈はいとけ

なかりせバかゞられしとすてゝおもき罪かうむりなきてまかりしにおなじく父
ともにゆく長安の都にゆきて父すでにめしこめられけれバ緹縈と
つかうやみをもちげくなげきさゝへける宮門にて文帝の目に付
ゆゑに時まかまハさざきよにはまれひそかにおりはざる手のよりて
かなしむからのべしとらをもなかりおそれ死ぬるもののハ二たびいかるべからず
きられしものハ二たびつゞきを後にあやまちをひくぞうつの
ためんとすれどもその道よこへ婢となりて孫かくて宮門とが身
とめされよとねがひて文がつくづくとおぼしめしてそのこゝろざしを
てあはれとおぼしめしてあはれてさんと帝こゝろしめされてやがてそのこ
しくりそへとぬくくあはれませあはれバ父がとがをゆるさせなく

まうふ霊が下よみてあはれとおぼして死罪肉刑の法をやめしくゆる
されまで緹縈がおとしふ一書をたてまつりて父が死罪をなだ
すくふのみならずこれよりて万民の上までもおほきに仁
政のさいはひとなりぬこれその孝行のまことよりおこるが故なるべし
漢の曹娥ハおさなきより心かしこくしてそのち
母に孝をつくしけるがある時五月五日に山おひのみおやくみか
ぶらおつるのあわけるに父の曹盱行のいはまはりてびろ
ひのさしはまそこのんに曹娥おやをかりてひとつしまでさ
がけてなきりげるがすでに川中にまづたりて曹娥もと
そのくなれかざるへあかるにへて文をさがりのもかれども

ゆゑくてしゝ記ゆゑわ三白あわてつら文がかく○とぞ〳〵
ゑよきれおかしきるを望人(ぼうじん)のふかしとおもはれそびゆるしき
かしこきわ、ちさあけの曹娥(そうが)ハとし十四なりしとや。そのねむみる
何かし碑(ひぶし)とさだらしてそのとろをあらしかうてとそて、たゞしま
つかしをり碑(ひぶし)乃文を時の名人(めいじん)にしわかれ曹娥(そうが)の碑(ひ)をぞ
せようひつてんあれ
唐(たう)の楊香(やうかう)ハ農家(のうか)のむすめなり。父を楊豊(やうほう)とてあるおもとに
ゆふ田をかりゐけるかへ虎(とら)あらわれてきたるなを父をとらふ
すなり。楊香(やうかう)とし十四なりけれバすゝむからびかゝりて虎(とら)の
くひをとらへて、おさへけれバそのふところのはをあらかよ神(かみ)れち



かしやそひきん虎におそれてにげさりぬさて女ハたちよりふさかり
そのちゝをくめて家たちかへりおもくわづらひの里にまかりし
ともそく孝行とあつかひ申すとかや
又此漢王武ふじとめありこれも農夫のむすめなり父ハ年おいハ
とりよわく家ぶりけりしかるに翁まてよそりハむしとめハ山
よぬきりに父がよりつれしまはちどりがきこしにわくつんうたハ
翁ハこや山狩とゆして其の父をむかへのがるゝむすめ追ゆくに
ちよ父がすくぬりをきそとりてあひつき翁のなげきふかう
らさてとそやをくらゝまかれバ父ハのちまてくわかれ
くてうも孝感によりて鬼神のたすけまけるにこそ

宋(そう)の詹氏(せんし)はかしこきやまめのむすめなり。年(とし)十七なりしが、
そのかみ宋の一揆(き)れつきものおこりたちて、織(まわり)里をや
ぶりしかバ、人々みなにげまどひけるが、むすめなげきて
いふやう今(いま)われ一人とすれもおやことゝもまぬかるべきやうなか
しよそへりてしすでにまさぶりとらへかゝともなくみのふ
おうひとなく父(ちゝ)と兄(あに)と伐(うた)るゝところさんとひとむすめぬすと
あくまるにこゑやしくはへども得かたくゝみ軍(しやうぐん)にたのみゆるいハ
らせん父兄かいのちまあかふとせまくへよばふてゐかるし
総(そう)らんも益(えき)なしに事ならずとひはたれだけおもふしそ。
いもおとりて父兄をゆるしまわびをめくらしげられく

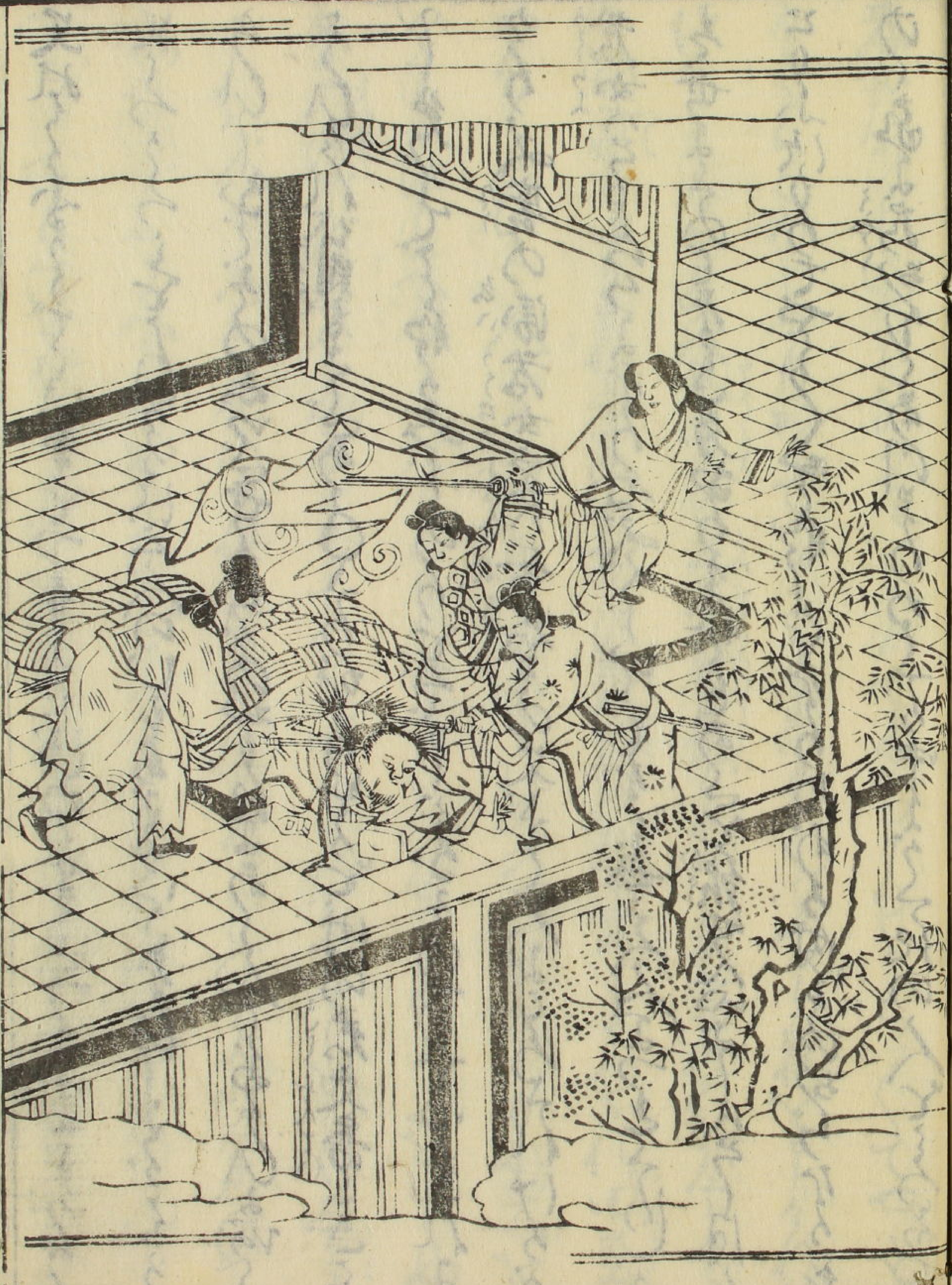
父兄をむかひて父母ハまされいまかりね軍(しやうぐん)にそばいへまいらせ
しが何ゆゑとのこしおわかれんずるをやめりけたなかざれ
と。なくさめて乃ぢし麗かはる男ハものゝなどもまちさらひて。
東(ひがし)のかた八ゆきけるがじおる橋(はし)より入りおどりあがりて男
となげいもおくぞそなりぬ人これをあやしさうかされども
むかふありしかどわきてよまりつ文元の李(り)泉(けい)文(ぶん)が妻(め)なれ
徐氏(じよし)名ハ彩鸞(さいらん)よりなりぬるのちまづりつひに宋(そう)の文(ぶん)
天祥(てんしやう)が徳(とく)をすじていふ節(せつ)義(ぎ)をれへぶしにつゞかさく袖をぬ
しきりあるとの室(しつ)のさぶれはおひくぞその父まちさぶひちら
ふ山中よりくまでうりとのくぬるのすてころさんとしければ

綵鸞たゞげきくれい文なりけるが夫かくべく文をたしなみける
まへとしひろれど文をゆるして綵鸞とよびゆく綵鸞もそ
うふ文よつがえていふく我死ぬともかなしむことなかれ
りのくぬよまさぐひく桂林橘といふはしをさしつ時に端をは
うり、あらずしともうひておもうりかくるにはかにすへにうつぬを
なく桂林の橘れりしのあるにそそが坐をてしちなるがいさなるによ
きやとしづかにじおりけれどもちあやしき人のめぐれ来りぬよお
ちちづくりとくしてひとさありければむさしとうりひまくつみ
とかけくなまくなりけるに二人のむとあ父が命よありてそのかみと
きがふびんとこれともよそのあとにきそり

漢の趙娥といふ女ありその父人のためにころされぬおとゝ
三人ありけるがみな病してともにうせぬかたきの人よろこびて
いまはおのれをおそるゝ者なしとおもひてこゝろをゆるしけるに趙娥ひとり
のみそのこゝろざしをわすれずいかにもしてあだをむくいんと
もとよりひそかに刀をかくしもちて車の内よりうかゞひけれども門
のまへにてゆきあひしかども十とせあまりをすごしたりしを
えさりけるがおりふし都亭にてゆきあひくつろぎゐたるを
かくさずつゞきて縣のぬしへまいりて父のあだをうちすぐにおもむ
てんぞやつみかるべしといふ縣令めでてこれをうつたふ
ひとやに入らんとおもひけれどひそかにゆるしてそのつみをゆるしてあてて

嫦娥しらずにおちらくきんらい。趙娥がいくつくらゐとゆくわ
のつまみつくは座川とが身よおくさまつる義なり。つくとうし
人ぞとぞも身ぐるしつくどまつるゐなり。ぶとり身とかくさつしに
とくはなと雨ぎんやしておいつく此てこめつかくぬけつが花の
ぬら太敷(しや)よあひさくゆかふれ和とつつさぞの家よとろうとあげ。
ゆくし紀めぐ波して蒼鷺(ろうぎ)とあがめげるとや
又晋(しん)の王廣(わうくわう)といふもののひとめあおのうちらさしよところひく
あくてさみつおつこめ此ふ。又ハ楊州(やうしう)のちなりつが。梅芳(ばいはう)と
いふ名びとよ玉とやぶれ。身りころされのつり。ひとあハいまご
すへかりろうが。梅芳(ばいはう)とりてうりつきされどかうて身とまかりて

ぎうさしじとおろ衆のくらさよまかれ梅芳が国よあのいつて
うらけおがかひなくうらあややうりてぬさしとそけど梅芳(ばいはう)が
ろうきつくらいうまぞひきつうかぞやつひくれどひとあおくゆうでの
ありくらじしめくすかから間宮(じうん)しておまるり
隋(ずい)のとき王彝(わうゐ)しい若安(わうあん)がるぞの又つとおろもの。丈婦(ぢやうふ)のくこめ
ありさる王ありぞ州よ王彝(わうゐ)とつづりにせるそりつくとおかわ
あり王粲(わうさん)いめつ王璠(わうはん)いゐなりつられりおのさとさかをや
なりてゆうりの家よ属しかられめけろが王彝(わうゐ)二人のゆりしてぶ
ひとうくらくしとろり志ろよおくさとゆくかんひそうにまゐるて
中かしうくへ気とそうてひそめとかりびとれバそのふつひ



もせざりしが年ふるまゝにおもくわづらひていまはの際にもいひつゐ
ならべしつまへいひけるはわれをもころしたまへる月ごろのうらみを
ちゝあてゝさうらふかすてゝゆくはうしかりけるなればこのことはさいご
又のあさむひさしてけ月日すぐせしてそのひめかけくなりし
かれらは女よりそのあとをはらしこゝおやのなきあとこそ不知
世よすまふし人なるしがとこのおやのたちまちに目がくれ
うらみそれきんとひとりに妹をもころさんとしても
なさけもなくつかさとりてその家中までのまかりてはも
とらわれのびぞうしの家にゆきてかのかなぬうもとりぞ
らしてこのびいかうの丈夫とおりあへしにうちあてゝ

又なるはまうでゝけ事とつゞかずはぬかまことつゝさよふり
そらごとをいひかけしに人のひとあやしうかぞありしうちとう
らひしおどろのちてゞてやろとぞのありけるあへしあかひかひ
そひしが闇もさとあるをうかりきそとけの君文帝きこ
しめしてごみるみしのりとそぶしぶそのつゝとゆかされは
なり。又唐の宋孝女字ハ若昭貝州の人文さとしなよらかされけるが
孝女はらしらつはなりぬべうかしなく母さへはつまさらしう
そ世よそのことたる男なりされどもおこさを鋭ぜんゆづしはぞ月と
とりふたりてやうくあやしくなりぬ。おろ時そのおちらなりを
めく敷ほおはおかりくあれゆりのすろ中まうく紀の人とゝつゝあ

孝女たちはやくしぶんどうじおの尾とうりてめもしらくてやを
かうらところかへてつくるまつりくづ飛とゆかれ、
はかりて世に養守を徳宗皇帝きこしめされて座すて
その飛とゆかされしがのおまつくん雁門郡よめしつされし田寛
おりくびく人はめあいさせのふぞれ女のあくまでのふ天と
てゆうはとみびかてんとうりふ世よう川遍うどあくことしく姫
あるの大清かず座あよりてのちゆかされてゆゑしとくぎやう
ざれば人とあをを宮のがんしられどあるくすの時ハ居びて
あらかうへくさをおりひ文ざらうりわりて時とうしおかんるを
とありすのはきをおろし身をとうりらびて平意くぶをのもち

かゝりし道ともおのこおいでゝかわりぐさたりしを悲しみて
かくおしえつるそのなかしすゝみてござあそばしまゐらせしこれも蓼莪(りくが)
の詩としていひつたふよりて神力(しんりき)の冥加(めうが)ありけるにやとぞいひつたへり
漢の代に珠崖(しゆがい)の二義(にぎ)といひしは珠崖(しゆがい)の縣(あがた)につかさ何がしのむ
すめとその継母(まゝはゝ)と二人が義(ぎ)をいふそのかみしるにあり清き男而
ありければ妻子(めこ)むつましくなかよくてんとし珠崖(しゆがい)は南海(なんかい)の
ほとりにて真珠(しんじゆ)のおほく出る所なり其の清(せい)珠とりきてさうひと
あるをのちまでわするべしなくて母珠崖(しゆがい)にてむじちあきたりしけ
るにしけ珠(しゆ)をとくる時にもひてうれたてうりもちろと年(とし)にいはれ
なるそのことはしけるが珠のうつくしさふされとよりて母が臂(ひぢ)にかけて

関に入ときはおそろしとて母子のみあひぐして喪(も)をおくり
かへるが関吏(せきり)よりてきまつるは珠さがしまうけるにおそろしきされ
しあどさんが前し實(じつ)ちもあらはれてやされど大ははなれいのと
母さん母子ともにそのそれとさがしてさがひければ
ひとあらじ十三才なりけるが継母(けいぼ)よりてみおくりてとしとさかしく
その令(れい)ようわが人をとひければすゝめてく義の罪(つみ)とおもてをまうとこと
関吏ゆうゆるてうはかりさるとさひければ母がすでにひとしさうへくく
くありこのあまりよかくしそれは母が志りてかゝるをまへはいかにやとひ
それバ母さてはいぶかしくもあやまちをとてどうしくひくろとしれど
その涙(なみだ)にむせびてそこに泪をとしがくをりひてゝるくさやかなくるにおもてかう

みなとすてゝもこゝろとなさけでなくおもつらふかりてすなからいでく
いろく海てうのひとをめぐりするにゆうびらの珠ハ海つとがひらかれ
つみて代りぬしよるがまゆしく扨がすりすそりすて代られまつで
しとてはてうゑそさゆひつろとなげきの中れかぞてよおさされ
こゝりのどもとかひづて徐られあつくべし比まぐれなようまい
とつるよ代り我しかも継母にあらんてうひられバしきとめ継ある
がひろくやまびん母の心ざくぶれがおもきさゆうの命と母よゆづりうられ
しそく人ゆゑよ子ハうがゞしかざさなる難としかうこともせさあへども
ことれどもひとをあてさいて我さ心の母乃とくをいさつろみおもつた
人じいさゝれ母よりおもくあられして男よりかへとおりへかるまいそへ

御母がつとさりくゝるまほつどもこれも心なきこゝろかられてつひられ給
こゝくりの神を志りゝぬハ明し開ち世を亀とりふかうなくらてまくれ
情ごひりゝく我を年の母そて世の心ほさてあわれへども親の継母をあひ
左つるゝかどりよあもまあへバ我を心とひとつてよかくあるとさとまこゝとつ
あふよるみへんや。その人たびひよゆづりあるべしいふぞきつのまはりへべき
よそられ事もしまことそ知りゝるもその情まづむめのとがきつるゝ
とうあるりねかれとも二義の孝養とてあるれなるかぎりうまのひつる
へけるけかり。ながゝるふうう継母の命よらうんとおりひとりてむり
がつきうしみ海てにでゆくし継母ハされが継をおまどともうるうを
てのがなまじきをえをおりひかまつが母が男よつとのそうらんへとう代

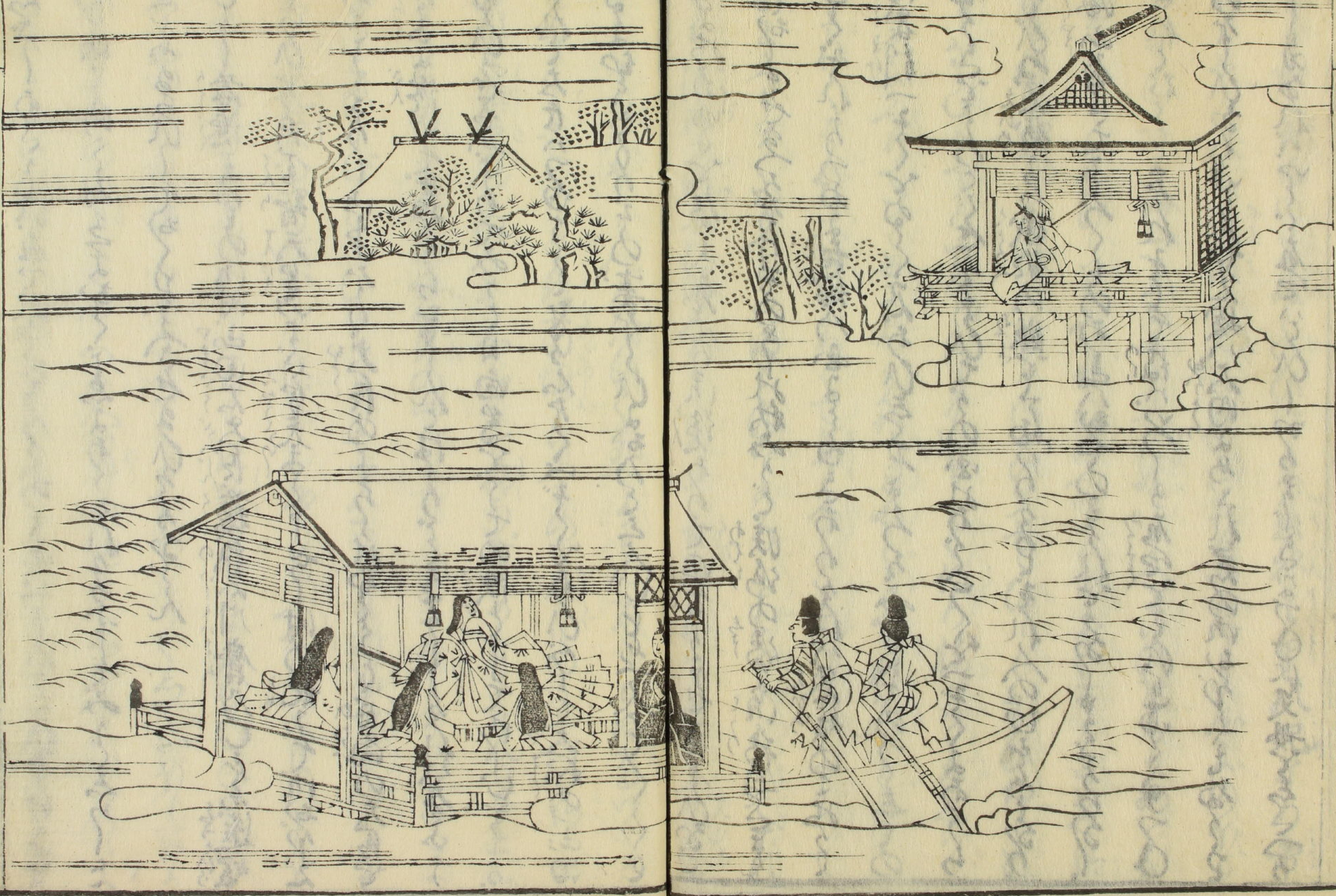
おそれなくゆくその死はわるくさこつ義によりて男とうつりまでもそれを
すくなくひ。書すれば、しぐも多からず欲する所は義もしまくてらが欲
もとる所なり。二のものゝえぐくるゝべからされば、生をすてゝ義をとる
ひとのことと此二人生きるもの義みれ祖孫がくしく死りもるのなし
べきことわりまことふまへつるゆへよかくれもし。後しにそれるべく
さゆゑしはの世までもたえひまるべくつたへるなりとぞ
宋の朱娥といふ孝女は朱回といふものゝむすめなり。おさなきより母を
うしなひ、おほぢに養はれありしに、其の里の朱顔と
いひけるもの、おほぢと争ひて、ぎりとかさんやしけれバ、人みな
おそれなくおとろへゆくふしむとあるがうふすよなりけるが、ひと

のをかさぬみくらしもとぞその中にあてふせぎ。ゆゑに朱
顔がこゝろよりとひへ男のそかゝふるとおしさげて、殺さんとせしを
もおそれもへこゝろされもしひとつふせされ。おそぞそのけのこなん
きり。朱顔ひとわすれどともぬまでひこぶりに切られども、ひくへつよ
身ともおもくぎりられバ、つゐにそのまゝ死のそのあとえとくら
きりて死をとげる。ときに宋しもはおさなくねれめぐことありて
さるべしその志をまたとかくまで會稽の人たちなをやむし此
ひとのもちをぐくらしの曹娥がかうくの例よもそくへき
と朱娥といふむすめもしれ曹娥よそへまつりてなぐさめ
やゝるみなりけるとなん

まづむかし吉備の兄媛といひけるハ應神天皇の妃なり帝
あるとしの春難波の宮にましまして高殿にのぼり
させ給ひとをく海山をながめおはしけるに兄媛もさぶらひ
が兄媛くもらかげにしみじみとながめゆくへはるかにおもひやらせ給
ふ

むかしれど座つきしばしの父母のむかしくおもひ給しに
つまかなしひのやまりてなげきしくはりちからおとろへ
かしまよえりて母に見んと仰ければみかどとさに
めされくなんぢ二おやにおくれて年へしくなりなりて
何ぞくしうくおもはるゝ故とぞおぼゆるをのおもひてすれ
とて淡路の御原の海人八十人をめしあつめて吉備におくらせ給ふ兄媛が

西よりゆくをたゝえ舟よりのれ泣わかれておくらせ給ひしに
りやかしまゐらせまつりたりぞのち秋みかど淡路の嶋にみ狩をしたまふ
もくぞれなりつねに吉備の女にもおもひわたれバ兄媛のこひつく
吉備に行幸なれ一ぞくをあつめてそのほかみかどそのつきの
ゆきをよろこびせさせたまひてそのあくらつくとぞくまありける
そびぬ兄媛にハ織部の縣をたまはりてそれ人のひとつありけり
海山へだてゝつくしのちぎりをおやのちよれをまもりつゝ
されどおとこまたれそしてはやうしう寺をそらしゆくすゑて
のたしひおのはるんやう兄媛ハ大内よりめされ君の御おやくも
しみあれバいとゞ又はりひしかりまゝもをまづに父母をおもひつる



んぞしあさりしば、危くれりしこゝろふかくさて、一しからひたなげきしに
かゝるのこゝろなきおもくして、よわくそれをみとゞめらしこ
とゞめあらびしてありけりともせあひろきかりけん
むかし孝徳天皇の御時、山田右大臣蘇我石川麿のむすめ遠智
といひしハ、天智天皇いまだ皇太子と申せし時の妃にてわたらせ給ふ
あさりしざりし近年なり。大臣のおとうと日向の大臣と
なるが讒して君をうらまんとはかりごとをめぐらしけれバ太子ふかう
あひだをひきさかんがために日向をもつての使としてうかゞはせらる
されど大臣はつゆもしらせんなく、ぞくとうひそかに大和の山田
寺にむかふ。そのときの妻なりしひめおやと三人ひとしく一人ともくしと
なくさて死ぬおりくへも殉ひく死をりりのおり。日向名つくさ
とのゝくちるとうりす代二田塩とかをのよ大臣のうくへをやくせ
それど塩太刀をぬきて肉をさしおどおめきさけんで
きりそのゝち大臣忠貞のゆゑしあらはれしかバ太子これ
をくやひなげきましゝよりて日向を太宰帥にな
しく筑紫へうつしにながし給ひける。妃ハ父大臣の事を
いとしくおぼしける時ニ塩といふ名を忌たまひ
しくおぼしけれバ塩といふ名をきくもいまはしくおぼしけ
かよりてその御方にさぶらふ人ハ塩をも堅塩といひならはして
ありしとなりひめもとやそのいたましさのほどをりてつゆならざく

なりとひとびとはいへどもさらにきゝいれずしてそのひくまゝにとかく
ありしかどもつひに孔門(こうもん)の子路(しろ)衛(ゑい)の国に仕へてられし衛人(ゑいひと)のため
殺されしかば孫をうばひしかばかのしけるをきゝてそのひとくるしみかなしみかとし
わざはひをまねくおそれありてすてさせのひとしからず妃(こめ)の
ことばのごとくなりしこそ山かなりいけれはつとめ
まつくわくんなり妃父のかくごしくはやくもて孫をはなちたまふ
ならしむるも大臣(だいじん)の謀(ちう)をとぐひあひ妃の教(けう)をなげきもすゝまれ
わざはひのあつまる日向(ひむけ)を謀(ちう)しあやまりしかれはさせたまふ
どもいなりけるはいかゞせんなりといふ
旨禰連波自采女といふは対馬の遠江の人なりけるとかし

てはちかひもいしてまたとあらためてその父をひつぎまつりて男波
かりまくれはかゝりを墓(さう)のほとりにむすびのまつりのまに斎会(さいゑ)
をもり孝義(かうぎ)をいてくらぶしたゆく人をみんとて感(かん)ぜずといふもの
しかりて徳(とく)よりかくれはかなくそのつきをゆるされくをの
門にたてさせおひたり称徳(しやうとく)天皇の治世のことなりかゝる人には天
か下にみことのりして孝子順孫義夫節婦(かうしじゆんそんぎふせつぷ)をえらびてさせたまふ
そのひとくみその名より奏聞(そうもん)するものかりかくれは賞をたまふたまふとあれ
て租(そ)をゆるし役をのぞき爵(しやく)をたまはりその門(かど)を閭にたてし
とあるがみなあかりされその徳行(とくかう)をあらはして世のすゝめとなし
かりんかくあなりされはつくしけまつりて旌表(?)せられし物なり

又難波部安良売ハ筑前の生れ人なり。いとをさなきよりよく父を
うしなひ母によくつかへきこえ、ちゝ母ともにみまかりぬ。安良売わさゆ
ゑありてふかくなげきてひとりすみけるに年十六にして
宗像郡の大領外正七位秋足が妻となりぬ。されど秋足へも
まもなく世をさりしかばやもめとなりければ、ひとつのこゝろを
もちゐてこゝろざしかはらずして、つねにそのいましめをまもり、天長九
年にきこしめされて位二級をたまはり、つきとゆるさせ給ひぬるとかや
ひとりある人の母を見まもりて、そのかみおやにつかへまつりしに
なくなりしのちもひとりすみてとしをかさね、ひさしく其
墓をまもりて、そのほとりにてはかなくなりぬ

いさゝかのわざもひとつもたがひなく、年月をかさ
ねても、おやのおしへのまゝにつかへ、ひとへに人の見る
めをも、人のおもひをもはゞからず、そのみさをのまもり
かたく、ゆめのごとくにありしかば、そのねがひの外に
けんざいなりしかば、きびしくゑらびたまひ
まつりごとにもたすけあり、おなじく
まなびしとてうの墓をまもり、ひとつにこゝろざしを
てらしてゆきしかども、ゆるさずつゐにおやのもとへ
もどりてそのおやにつかへ、ふかくをしへをまもり
てわがこゝろざしをとげけるとなん

あつまれさらかまたべ兄ハ紫苑とよふこともまうしけり。
いかうとハ巻志その根毎くつましゆゑよひ巣をみるまつもてさ。
いよくりえわかくあかくをみまさるなりつるかし

比賣鑑紀行巻廾三